

『経済倫理＝あなたは、なに主義？』

アンケート結果（2015年9月26日）経済教育学会（会場は日本体育大学）

橋本努 20151015

経済教育学会の会員の方々のアンケート結果です。

耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義 8名
市民的コミュニタリアニズム 4名
リベラリズム（福祉国家型） 4名
国家型コミュニタリアニズム 3名
マルクス主義／啓蒙主義(1) 2名
平等主義／啓蒙主義(2) 2名
共和主義 2名
新自由主義（ネオリベ） 1名
近代卓越主義 1名
リバタリアニズム（自由尊重主義） 1名

計 28名（有効回答のみ）

経済教育学会全国大会（2015年度、第31回）におけるアンケート結果です。

これまでさまざまな機会にアンケートを行ってきましたが、今回はきわめて異例の結果となりました。「耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義」の立場が、最も支持されたのです。

「耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義」は、八つの主要なイデオロギー類型に当てはまらないばかりか、この立場を思想的に代表する論客がいません。少数派の立場であり、思想論議においては、見えにくい立場であるとも言えます。

その思想的内実を探ると、政治に対して「ノー」を突きつける一方で、政治そのものを嫌悪する立場であると推測されます。そのため、政治の対案を提起する方向に向かわないよう見えるのですが、もしかするとこの分析は、私の誤りであるかもしれません。この立場について、さらなる分析が必要です。

これまでのアンケート調査では、この立場を支持する人は、若い頃に芸術に関心を示した方々が多いようでした。例えば、高校時代に美術部に所属していたとか、バンドをやっていたという方々です。美術や音楽など、美的なものを重視する人は、自身の美的感性に自尊心をもつことがあります。他人よりも美的センスがあることに、優越感を感じることもあります。そのような美の自尊心（プライド）を基盤として、この立場の人は、政治的なもの全般に嫌悪を示すということがあるようです。政治家ほど美的センスのない生き方

はない、政治家の言っていることは野党を含めてすべてダメだ、と感じるのでしょうか。

あるいはまた同様の理由から、「耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義」者は、経済的な利益を追求するビジネスマンの生き方に対して、嫌悪を示すかもしれません。経済的利益を追求することを人生の目的の中心に据えるような生き方に対して、批判的であるかもしれません。むしろ経済をよりよいものにしたいという公共精神をもったビジネスマンに支持される立場、と言えるかもしれません。

それにしても、どうしてこの立場が、経済教育者たちに支持されるのでしょうか。この傾向は、教育者全体に当てはまる傾向なのか、それとも経済教育者に特有な傾向なのか。調べてみたいです。

(以下は耳学問であり、実証データは手元にありませんが、アメリカでは、経済学者全体と、経済教育学会のメンバーとで、どちらが新古典派経済学的な発想をする傾向が強いのか、というようなアンケート調査があるようです。それによると、経済学者全体の傾向よりも、経済教育者全体の傾向の方が、新古典派寄りだそうです。これは教育の現場において、新古典派経済学の内容が、支配的な教科書を通じて流布しているためでしょうか。)

政治権力と経済的利益の追求は、いずれもいわば「精神の売春」であって、望ましい生き方ではないという考え方があります。自分が自分であるためには、あるいは自分の精神を取り戻すためには、「芸術」と「教育(ないし学問)」が糧になる、あるいは宗教が糧になる、と考えられます。こうした考え方は、ある程度まで、芸術家や教育者、あるいは学者や宗教家に共有されていると思いますが、しかしそのような意識をもった人たちが、どの程度まで「耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義」の支持者であるのかについては、さらなる調査が必要です。

この「耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義」の立場を、もっと積極的に解釈することもできるでしょう。教育の方法として、この価値観を採用することの意義は大きいかもしれません。この立場の教育方法論は、政治権力や経済利益を追求する人間に対して、弁証法的な「否定」を突きつけるでしょう。「権力を得たい」とか、「利益を得たい」という人間の勢力的関心に対して、「ちょっと待て、それでいいのか」と反省を促します。生徒たちは、そのような「否定」の論理に導かれて、自らの倫理的判断力を鍛えていくでしょう。もちろん教師は、生徒たちの勢力欲をすべて否定したいわけではありません。そのような欲求を、精神的な欲求へと高めていくように期待するでしょう。経済倫理教育には、こうした人格形成上の弁証法を促すという作用があると考えられます。

このようにみると、この立場はもはや「耽美的破壊主義」や「支配者嫌悪主義」ではなく、新たに「弁証法的人格形成主義」とか「否定媒介的教育主義」と呼んだほうがよいかもしれません。

今回のアンケートで二番目に支持された立場は、「リベラリズム」と「市民的コミュニタリアニズム」でした。「リベラリズム」は、これまでのアンケートでも多数派でした。これに対して「市民的コミュニタリアニズム」は、これまでのアンケートでは少数派の立場でした。この立場は、例えば生活協同組合など、自由なアソシエーションにもとづく組織活

動を重視します。自由な連帯を重んじる立場であり、自律的な個人を前提とした上で、国家と個人のあいだにあって、民主的に参加可能な中間集団こそが、「善き生」を可能にする、と発想します。ただしその場合の中間集団は、何らかのかたちで国家組織と結びついていることも多いです。この立場が二番目に支持されたというのも、興味深いです。

教育の現場では、「学級（クラス）」が一つの連帯の単位となっています。その組織を教師のリーダーシップによって、市民的かつ共同体主義的に運営することは、学校教育の一つの理想であると言えるでしょう。こうした考え方に基づいて、経済教育者たちのあいだでも、「市民的コミュニタリアニズム」が支持されたのかもしれませんが。これについてもさらなる分析が必要です。

最後に、アンケートでは、「近代卓越主義」を支持した方から、次のようなコメントをいただきました。「自分ではリベラルだと思っていました。現実にもそういう行動をとっています。しかし結果は現代の若者に近くて、おどろいています。本音のところはこうなんだと初めて思い返しています。6x才です。」

「近代卓越主義」は、これまでの政治経済思想においては論じられてこなかった新しい立場です。この立場は最近、大学生たちのあいだで、リベラリズムと並んで支持されるようになっていきます。「21世紀の新しい思想」であるともいえます。今回の結果では、この立場を支持した方は一人でしたが、それが60代の方に支持されたというのも興味深いです。

以上です。会場の皆様、アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。